

大学生、経営者、先生、保育園長も入っての熱いトーク

「こどもまんなか時代の子育て」シンポジウム

「託児付きランチのこころく」などの子育て支援サービスを運営する株式会社こころくが、創立 10 周年を記念して「こどもまんなか時代の子育て」をテーマにシンポジウムを開催しました。

第 1 部 昭和・平成・令和の子育て

穏やかな春の陽射しが会場に差し込むなか、こころく代表の山下真実氏による挨拶でスタートしたシンポジウムは、玉川大学教育学部乳幼児教育学科教授の大豆生田啓友氏、上智大学総合グローバル学部3年生の野尻彩菜さんを迎えて、子育て史を振り返りながら、「こどもまんなか社会」の実現に向けて、企業・社会・一人ひとりに必要な視点についてトークセッションを行いました。



共同養育が当たり前だったサザエさんモデルの昭和から、核家族化が進み孤独な子育てに起因する不満が一気に噴出した平成を経て、心理的 Well-being が OECD38 か国中 37 位という衝撃的な結果が出た令和。

山下さん 「大学 3 年生の野尻さんは、結婚・子育てについて、どう考えていますか？」

野尻さん 「将来、子育てと仕事を両立できるのか、漠然とした不安があります。

周りでも結婚したいと言っている人は多くなくて、私も子育てに対するイメージがまだ持てないですね。」

山下さん 「大学生のうちから、子育てと仕事の両立のことを考えているなんて衝撃です！」

「子育てのリアルを知ってしまうと、心配になってしまふこともありますか？」

野尻さん 「2歳の従妹がいて、叔母から子育て中は自分のやりたいことを我慢してしまう、イラライラしてしまうって聞くと、自分もそうなっちゃうのかなと心配になったりします。」

Z 世代の野尻さんが「子育てと仕事の両立が不安」と感じる理由は、大学の一般教養で「日本のジェンダーギャップ指数」の4つの指標において、日本は①教育②健康のポイントは高いも

のの、③政治④経済が特に低いという結果を見て、『社会に出ると男女差に悩まされるのは…』と不安になったから、とのこと。

そこで、大豆生田氏が「はじめの 100 か月の育ちビジョン」を紹介。5つのビジョンのうち、特に「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする」と「子どもの育ちを支える環境や社会の厚みを増すこと」が重要と述べました。全ての人の Well-being に繋げるため、社会全体で子どもを育む「子どもまんなか社会」を作っていくましょう！と呼びかけると、来場者の多くが大きく頷いていました。

- 山下さん 「保育園の子どもたちが園外保育で街をお散歩していると、よく手を振ってしまいますが、今ってむやみに声を掛けてはダメな風潮がありませんか？」
- 大豆生田先生 「同感です！僕は、ぐずっている子どもにいつでもあげられるよう、カバンに子どもたちに人気のキャラクターのシールを忍ばせてるんですよ(笑)。」
- 山下さん 「いいですね！公共トイレで子どもに順番を譲ろうとママさんに声を掛けると、周りに迷惑をかけてしまって申し訳ないという気持ちが強すぎるのが断られたりするんです。そういうときは、『いやいや、私も母親なので気持ち分かりますよ！』って言ってあげるのも大事だなと思います。」
- 野尻さん 「私も特に仲良い子でないと拒否されたら嫌だからあまり声を掛けられないかも…でも、サッカー観戦が好きなので、スタジアムで小さな子どもに前の席を勧めたりとかはできると思います！」
- 山下さん 「子どもたちってお兄さん・お姉さんが大好きなので、こちらから声を掛ければ仲良くなれそうですね。」

それぞれが考える、今日からできること。「子どもまんなかアクション」の具体的なアイディアが広がりました。

第2部 子ども誰でも通園時代の子育て支援

令和5年度に子ども誰でも通園制度のモデル事業に参画し、本年も試行的事業として継続する、認定こども園さくらの堀昌浩園長とのトークセッションが行われました。



「就労していないのに預けることに罪悪感や抵抗感があった」「こどもたちとずっと家にいる閉塞感を打開するきっかけが欲しかったのだと思う」「自分じゃない人から“こうだったよ”とフィードバックをもらえると、“これで良かったんだ”と思えて安心できた」…といった、利用者の声が紹介されました。

堀園長は、そんな子育て中の方に「こどもは子どもの社会で育つもの。ぜひお子さんにこども社会を経験させてみませんか？」と、呼び掛けているそうです。

こども誰でも通園制度利用のこどもを定員の約 5%程度の割合にすると、こどもたちだけでうまく社会ができていくように思う、という現場目線の話のほか、「支援する側」「支援される側」を極力意識させないよう、申込書に代えて LINE での予約システムを構築するなど、利用者の心理的ハードルを下げる配慮もされているとのこと。今では、利用者同士で枠を譲り合うなど、互助の関係性ができているほどだそうです。

山下さん 「こども誰でも通園制度が、“いつでも通園制度”だと勘違いされることが多いって本当ですか？」

堀園長 「そうなんです。“いつでも”だと親の都合でいつでも預けられるという意味合いが強くなり “こどもまんなか”を無視することになると思うんです。こどもはこども社会で生きるということを、事前面談でしっかりと保護者に伝えています。」

山下さん 「とても大事な視点ですね。これから時代に求められる子育て支援とは何でしょうか？」

堀園長 「地域で色々な方と手を組むことが大切です。それぞれのストロングポイントを活かして、垣根を越えてこどもに関わってくれたら良いですね。」

堀園長は、「支援」という言葉が過去のものになりお互いさまの社会を作っていくべき、まさに社会全体でこどもを育む、《Co-育て》ができる社会にしていきたい、と力強く語りました。



【イラストレーター・ひえじまゆりこさんによるグラフィックレコーディング】

【概要】名称:こころく創立 10 周年記念子育てシンポジウム「こどもまんなか時代の子育て」/ 場所:世田谷代田仁慈保幼園 Piazza(世田谷区) / 日程:令和 6 年 5 月 14 日(火)※オンライン生配信 / 主催:株式会社こころく